

目的 東南アジアから日本へかけての絹織物のうち、特にもめんの絹には共通した様式が感じられる。その共通性の要因と美について解明することを目的とした。

方法 インドネシア、シンガポール、マレーシア、香港を1976年3～4月と1978年7～8月の2度訪問し、現地調査と資料収集を行なった。また沖縄および本土の絹産地への現地調査および資料収集も行なった。

これらの結果と文献により検討を加えたが、インド、中央アジア等他地域の絹について、実物資料および文献を比較のため用いた。

結果 東南アジア、華南、日本へかけての地域は、稲作を中心とした農耕民族として、自然との深いかかわりのもとに生活してきた。また雨の多い地域で、水とのかかわりの大きさは、大陸部と比較して大きな特徴といえる。宗教的にみると、自然と密着して生活はすべての自然物に精霊が宿ると信じるアニミズムの世界であった。

歴史的地域からは、これらの地域は古代文明国であったインドおよび中国の影響を大きく受けた地域であった。しかしこれらの外来文化を直接受け入れたのは支配階級であり、織物では主として絹織物であった。

以上述べたような要因が、庶民の衣服として用いられたもめん絹に共通して現れられていると考える。カラフルな外来物に対し、庶民は限られた色彩、特に単色による美の表現を身近な自然物を文様として試み、素晴らしい織物を生み出した。アジアの島嶼部であるという共通性は、他地域の絹および絹の絹と比較して独自の美を有する絹を生み出した。